

田 Nuzhat al-Qulub に

見えるタブリーズ市

井谷 鋼造

はじめに

三年前本誌にルーム地方から始めた *Nuzhat al-Qulub* 地理編の翻訳が、アルメニアとジャズイーラ、アゼルバイジャン周辺の諸地方を経ていよいよアゼルバイジャンの本地に至った。史料本来の配列を無視してルーム地方（小アジア、アナトリア）から翻訳を始めたのは筆者の専門分野が空間的にルーム地方であり、そこに最も歴史的関心を持っているからであった。もともと *Nuzhat al-Qulub* が著された西暦一四世紀前半のイランを中心とする西アジア世界では衰えたりとはいえ、モンゴル人の政権、イルハン国がその支配勢力であり、その政権の中心部たるアゼルバイジャン以東の地域より見れば、ルーム地方はその一西方辺境をなすに過ぎない。

一九九〇年初頭ソヴィエト連邦内での民族対立の焦点

となり、連邦政府の軍事介入を招いて世界の耳目をそばだたせたアゼルバイジャンという地名はまだ我々の記憶に新しいが、現在のソヴィエト領アゼルバイジャンは本稿でいうアゼルバイジャンには含まれず、むしろかつてのシルヴァーンやアツラーン等昨年筆者が翻訳したアゼルバイジャン北方の諸地方に当たる。歴史的、伝統的にアゼルバイジャンの北境はアラス河であって、それ以北の地域は、河南のムーガーンを例外として（それも常にはない）アゼルバイジャンと呼ばれる事はなかった。②）ましてや、ムーガーンより遙か北方、かつてはシルヴァーンと呼ばれていた地方にある現在のバクー（昨年の翻訳中の「バークーヤ」に当たる）を首都とするソヴィエト領アゼルバイジャン共和国が歴史的に「アゼルバイジャン」と呼ばれなければならない理由はないのである。現在のソヴィエト領アゼルバイジャンが「アゼルバイジャン」と呼ばれる所以は特に一三世紀以降かつてのアゼルバイジャン北方の諸地方が民族的、文化的にアゼルバイジャン本地とのつながりを深め、結果的にアゼルバイジャンの呼称がその北方諸地方にも広まり、適用されるようになったからに他ならない。具体的にいえば現在のソヴィエト領アゼルバイジャンもイラン領アゼルバイジ

ヤンもともに住民の大多数はトルコ系のアゼルバイジャン人であり、トルコ語の一方言である所謂アゼリ語を話し、しかも宗教的にイランと同じイスラーム教シーア派に属する事で共通している。

さて本稿ではアゼルバイジャン地方の中心都市タブリーズ市に関する *Nuzhat al-Qulub* の記述を翻訳する。⁽³⁾ アゼルバイジャンの記事全体を翻訳するのはその訳注と併せて余りに長大となりすぎると考えたからである。イルハン国支配下のタブリーズは訳文中にも現れるようにその国都となり、市の重要性はそれ以前の時代と比べて格段に大きなものとなった。イルハン国以前タブリーズは一二世紀後半にアゼルバイジャンを支配する一地方政権、アゼルバイジャン・アタベグ朝の首都となっていたにすぎないが、イルハン国時代に一躍西はルームから東はアム河まで広大な地域を支配するモンゴル人政権の首都となり、その後のジャライル朝、ティームール朝時代はその重要都市として、続くカラコユンル(黒羊)朝、アクコユンル(白羊)朝、サファヴィー朝初期には再び首都として機能した。*Nuzhat* 中の記述もタブリーズについては、以下に訳出するように、イルハン国全体の国都として、他の都市には見られないほど長く、詳細なも

のである。

本稿の翻訳に使用したペルシア語テキストは *Le Strange* 校訂本七五—八〇頁であり、*Dabir-Siyaqi* 校訂本八五—九一頁を参照した。また、この部分については *Le Strange* の英訳(七八—八三頁)以外に *I. P. Petrushevsky* によるロシア語訳があり、*Z. M. Bunyatov* が *Le Strange* の英訳に基づいてそれを補訂している。⁽⁴⁾ *Nuzhat al-Qulub* (*materialu po Azerbaydjanu*), Baku, 1983. 35—65頁。本稿に現れたタブリーズ近郊の諸地区の名称や所在地については *Dorothea Krawulsky, Iran-Das Reich der Tlyane, Eine topographisch-historische Studie*, Wiesbaden, 1978. を参照した。訳注の中では *D. K.* と略。クラヴルスキーにより読み方と所在地が示されている地名には訳文中(*)の印を付した。また、本稿中に現れる人名については *Nuzhat* の著者 *Hamid al-Allian Mustawfi* の別著 *Tarīkh-i Guzida* の記述を参照した。そのテキストは *Abd al-Husayn Nawā'i* の校訂により、ヒジラ太陽曆一三三九年テヘランで刊行されたものである。訳注の中では *T. G.* と略。

第三章 アーザルバーイジャーンの諸都市 (bilad) について▽

それは八のトゥーマーンからなり、二七の町がある。その大部分の気候は寒冷な方で、穏和なところは少ない。その境界はイラク・アジャム、ムーガーン、ゲルジスタン、アルマン、クルディスタンに接する。その東西はマーカーヤ Makūya から⁽⁴⁾ハルハール Khalhal まで九五ファルサング、その南北はバーザルヴァーンからスイナー山 Kūh-i Sina まで五五ファルサングである。アーザルバーイジャーンの国都 (Dār al-Mulk) はかつてマラーガ Marāgha であつたが、現在はタブリーズ Tabriz の町である。それはイラーンの諸都市で最も素晴らしく、大きなものである。アーザルバーイジャーンの徴税額はセルジユク朝とアタベグたちの時代には、今時の約二〇〇〇トゥーマーンであつた。タブリーズのトゥーマーンには三つの町がある。

タブリーズ 第四気候帯に属する。イスラームの町である。イラーンの「イスラームの円蓋」(Qubba al-Islām)⁽⁵⁾である。その経度は永遠諸島より八二度、緯度は赤道より三八度である。ハリーファ、ハールヌッラシードの

妻スバイダ・ハートウーン・アッラーが二人に慈悲を垂れるように一が一七五(西暦七九一/二)年に造らせた。六九年後の二四四(八五八/九)年、アッバース朝のハリーフア、ムタヴァッキルの時代に地震で倒壊した。ハリーフアは町を再建した。一九〇年後、四三四年サファル月一四日(一〇四二・一〇・三)再び地震により全面的に倒壊した。カーデー、ルクヌッディーン・ホーイ Rukn al-Din Khuyi の Majma' Arbāb al-Mulk⁽⁶⁾には次のように出てくる。「その時そこにはアブー・ターヒル・ムナッジム・シーラーズィー Abū Tahir Munajjim Shirāzi という占星家がいた。彼は某夜その町は地震で倒壊すると予告し、統治者たち(nāḥkam)は崩れた土の下敷きになって命を失わないよう、人々を町の外の草原に連れだした。その予告は的中し、町はその夜全面的に倒壊し、約四〇〇〇人がその地震により命を失ったほどであった。ハリーフア、カーイムによってその地の統治者とされていたアミール、ヴァフスーダーン・ブン・ムハンマド・ビン・ラッヴァード・アズデイー Wawsūdān b. Muḥammad b. Rawwād al-Azdi⁽⁷⁾は四三五(一〇四三/四)年上述の占星家に選ばせて、蠍座の上昇時にタブリーズ建設の基礎を置いた。上述の占星家は洪水の恐

これはあつても、今後タブリーズが地震により倒壊するところがないように努めた」と。その後現在まで三〇〇年タブリーズではその予告が的中してきている。⁽⁸⁾この町で地震が多く起こってきたにもかかわらず、大きく倒壊することがなかったのは、今やその地中に多くのカナート(qanat)が開削され、井戸が掘られ、地中の通路が開かれてきたからである。そのため蒸気は強い力を出せず、激甚なる地震が起こらないのである。

タブリーズの囲壁の周は六〇〇〇歩であり、一〇の門がある。ライRayy、カルアGal'a、サンジャーラーンSanjārān、タークTaq、ダーループDarūb、ジュイー・サルドJū-yī Sard、タル・ダステイー・シャーフ Dar Dastī Shāh、ナールミヤーンNārmīyān、ナウバラNawbara、マウキラMawkilaがその名である。⁽⁹⁾モンゴル(Mughl)時代その町は国都となつたので、多数の人々がそこに集まり、町の〔囲壁の〕外にも人が住むようになり、各門のところには本来の町よりも多くの人が住むようになった。ガーザーン・ハンは全ての園林、人の住む地と村々、ヴァリヤーン・クーフWalīyān Kūh とサンジャーラーンまでその中に入るように壁を繞らそうとしたが、その死により完成を見なかった。ガーザーンの囲壁の周は二五

〇〇〇歩であり、六つの門がある。ウージャーンUjān、アハルAhar、シルヴァーン、サルドルードSardūd^(*)、シャームShām^(*)、サラールードSarārūd^(*)がその名である。

タブリーズの町の下手、ガーザーンの囲壁の外、シャームと呼ばれる場所にガーザーン・ハンは小さな町(shahrcha)を造らせ、自らの墓所(kh'wābān)として全イーラーン中に例のないほどの高い建物をそこに造らせた。町の上手には幸運なる宰相、フヴァージヤ、ラシードウッディーンその墓土が清められるように一がガーザーンの囲壁の内、ヴァリヤーン・クーフの地にもう一つの小さな町を造らせ、それをラシードRāšīd Rashīd と名付け、そこに多くの高い建物を造らせた。彼の子息で宰相、ギヤースッディーン・アミール・ムハンマド・ラシードイーその墓土が清められるように一はそこに多くの建物を付加した。宰相、フヴァージヤ、タージュッディーン・アリーシャーフ・ジーラーニーはタブリーズのナールミヤーン区(Ma'allā)の外にその中庭が二五〇ガズ×二〇〇ガズもある大きな集会マスジドを造らせ、そこにマダーイン(ルクトスイフォン)のイーヴァーン・キスラーよりも大きな屋根付きのイーヴァーン(suffa)

を造らせたが、その建造を急いだために落下してしまつた。そのマスジドには様々の工夫が凝らされ、大理石がふんだんに用いられ、それを説明するには多くの時間が必要である。今やタブリーズとこの二つの小さな町にある高く、良い建物は全イラン中にも見あたらないほどである。

タブリーズの町には園林が多い。サハンド Sahand 山から来るミフラーンロード Mifran'ud と富裕な者達が開削させた九〇〇余本のカーリーズの水がその園林で消費されているが、それでもまだ充分ではない。これらのカーリーズや河の水は、ライ門のザーヒド・カーリーズ Zahid、ナールミヤーン門のザアファラーニー・カーリーズ Za'farani、升六杯までは無料のラシーディー・カーリーズ Rashidi の六分の二(の取水量)⁽¹⁰⁾を除いてすべて私有である。タブリーズの気候は寒冷な方である。その水は消化に良い。河の水はカーリーズより良く、カーリーズは井戸より良い。タブリーズでは井戸は三〇ガズ内外で水に届く。シャームでは一〇ガズで届く。ラシード区では七〇ガズを越える。

その産物は穀物とその他の穀類や野菜がよく出来る。その果物は極めて良質で、豊富で、安価である。特に

tukhm-i-Khalaf とバイガムバリー梨、salati の林檎、フルヴァーニー Hulwani、tukhm-i-Ahmad の杏、ラーズィキー Raziqi とマリキー Maliki とタバルザド Tabar zad の小さな葡萄、マスドウッディーニー Majd al-Dini とヤークーティ Yaguti とマリキーのメロン、黄色い李はこの地のようなものは他にない。

人々は色白で顔立ちが良く、高慢で、尊大である。ここでは交際好きな者達は極めて親切で、言葉使いが良く、美しい者達である。彼らについては次のように言われてきた。年長者は若者よりも心地よい、と。貧しい者も富める者も、金を儲ける事を蔑ろにせず、その地方には金持ちが多い。彼らは交際や友情においては当てにならない。彼らについては次のように言われてきた。

ルバーイー(四行詩)⁽¹³⁾

タブリーズ人の性格とは到底友となれない。

全世界が髓なら、タブリーズ人は皮。

お前が友情において誠実とは思えない者は

たとえ余所者でもタブリーズ人の気質持ち合わせた者。マウラーナー・フマームッディーン Humam al-Din タブ

リーズィー⁽¹⁴⁾は答えて次のように言った。

ルバーイー

タブリーズは良い。その地に産するあらゆるものがよい。

その人々は髓。彼らを皮と思うなかれ。

彼らは反抗者達の性格には組みしなない。

天使は悪魔どもとは決して友とならない。

私も次の二つのルバーイーを書いた。

ルバーイー

タブリーズは楽園のようである。その人々は清純の至り。

彼らは嫌悪の鍔の付着しない鏡のよう。

お前は、彼らは友情において誠実でないと言うが

鏡はものを映すだけである。

タブリーズは楽園である。その人々は天女のように。

親切さについては天女、悪行からは遠い。

彼らは下劣な者、下賤な者とは交わらない。

何故なら芳香は悪臭とは一緒にならないのだから。

その地のならず者共(runūd)はとても凶々しい。この

状況はこの町の良い面に勝る良くない状況である。

この町では墓地は何箇所かに分散している。それはスルハーフ Surkhāf、ジャラーンダーフ Jarāndāb、カ

ジール Kajil、シャーム、ヴァリヤーン・クーフ、スイヤラーン Siyāran その他である。これらの墓地には靈驗灼かな墓が多い。例えば、ファキーフ・ザーヒド⁽¹⁵⁾、イマーム・ジャアダ Jar'da⁽¹⁶⁾、イブラーヒーム Kawāhan、バーバー・ファラジ⁽¹⁷⁾、バーバー・ハサン、フヴァーリヤーン・サーム・サッディーン Sa'in al-Din⁽¹⁷⁾、カマーリーニー Kamāhīn、バーリーニー Balhī、タブリーズィー、ハサン・ブルガリー、シャイフ・ヌールッディーン・サマールスタニー Samaristāni。スルハーフにある詩人墓地にはアンヴァリー⁽¹⁸⁾、ハーカーニー⁽¹⁹⁾、ザヒールッディーン・ファールヤービー⁽²⁰⁾、シャムスッディーン・スジャースィー⁽²¹⁾、アラキー・シールヴァーニー⁽²²⁾その他の詩人達。カジュージャーン Kajujan の村にはフヴァーリヤ、ムハンマド・カジュージャーニー⁽²³⁾の墓があり、シャーターバード Shātibād の村にはピール・シールヴァーン Pr-i Shrawan や偉大な者達 (akādir)〔の墓〕が多い。預言者の教友達の内ではサハンド山にイスファフサラーール、ウサーマ・ブン・シュライク Usāma b. Shurayk の墓があり、サラール・ドの畔にアブル・ムフジャン・クルド Abū al-Mujan Kurd の墓、サドルドの墓地にカイス Qays の墓、バーヴィールド Bawīrūd にハムザの兄弟イシル⁽²⁴⁾

の墓、スルハープの墓地にウマイヤ・ブン・アムル・ビン・ウマイヤの墓がある。偉大な者達の墓は町や〔近隣の〕諸地方 (wila'yat) に多く、全てを語る事は〔読者を〕更にうんざりさせるであらう。

その徴税額はタムガー税⁽²⁴⁾によって定められる。ハーニ一曆四〇年には八七トウーマン五〇〇〇ディーナール⁽²⁵⁾が帳簿で確定される。七つの郊外区 (nahiya) がある。

その第一はミフラーンルード区⁽²⁶⁾であり、町の東方にある。町の門からそこまで五ファルサング。クンドルルード Kundūd⁽²⁷⁾ *、イスファンジ Isfani⁽²⁷⁾ *、サアダーバード Sa' dabad⁽²⁸⁾ *がその主な村である。

第二はサルドルードとサフラー Sara^(*)であり、町から南西一ファルサングのところにある。サルドルードの村々と町の園林はつながっており、その大部分の園林はどの村に属するのかわからないほどに近接している。果実は良い。サルダスト Sardast^(*)、ドゥーシント Dushi^(*)、ジュラーラントラク Julandarag^(*)、アルガーンバダル Alghānbadar^(*)、クジャーバード Kujābād^(*)、ラークダラジ Lakdaraj^(*)がその地区の主な村である。サフラーには穀物が育ち、サラールルードの水がその農耕に用いられる。

第三のバーヴィールルード区^(*)は名高い。町から四ファルサングのところ、西南隅にある。素晴らしい地方で、実に一つの園林のようである。サマルカンドのズグド、ダイヤモンドのグータを⁽²⁹⁾写し取ったところであり、シイブ・バツヴァーン Shi'b Bawwān⁽³⁰⁾ やハマダーンのマーシャーンルード Mashānrūd⁽³¹⁾ もそこを羨むようなところである。二五の村があり、バーヴィール^(*)、フルルシャーフ Khūrshāh⁽³²⁾ *、ミーラーン Miān^(*)、ウスクーナ Uskūna⁽³³⁾ ^(*)がその地区の主な村である。

第四は町の西にあるアルヴァナク Arwanag^(*)区。それは町から三ファルサングのところから始まり、一五ファルサングのところまで続く。幅は五ファルサング。穀物、葡萄、果実からなる産物は良質で、タブリーズの中心部はその生産物に依存している。三〇の村があり、大部分は規模が大きく、一つ一つが小市 (qasaba) 程である。SNR⁽³⁴⁾ *、SNST^(*)、SLSWRWD⁽³⁵⁾ *、ダーブガーン Dabghan⁽³⁶⁾ *、クーザクナーン Kūza-kunān^(*)、スーフィヤーン Sūfiyān^(*)等の村がある。

第五はルードカーブ Rūdqāb^(*)区で、スルハープ山の背後、町から一ファルサングから四ファルサングのところにある。穀物が良く育ち、ここでは一〇マンの粉から

一六マンのナインが出来る。約四〇の村がある。ルード
ヒンド Rudhind⁽³⁸⁾、サールー Sarū⁽³⁹⁾、ブランジュク Alanjad
(*), ウーファリード Ufarid (*) がその主な村である。

第六はハーヌムルード Khanmurd (*):

第七はバドウースターン Badistan (*) 区で、町の北、
ルードカーブの背後にある。三〇の村があり、マードル
ガーヴ Madargaw (*), ウーリーシャーク Urshaq (*)
がその主な村である。

これらの郊外区の徴税額は一〇〇〇〇〇ディーナール
余である。これらの郊外区のうちで、ガザニーの王室
のヴァクフに付置されるイーンジュ地⁽⁴⁰⁾は一八五〇〇
ディーナールと定められており、地方の徴税の全額は二
七トウーマン半となる。町のタムガー税と合わせて一
一五トウーマン⁽⁴¹⁾となる。

タブリーズからアゼルバイジャンの他の諸地方
までの距離は以下のようである。ウージャンまで八フ
アルサンク。アルタバール Ardabil まで三〇ファルサン
ク。ウシヌーヤ Ushnūya まで三〇ファルサンク。ウル
シーヤ Urniya まで二四ファルサンク。アハルまで一
四ファルサンク。ピンキーン Pishkin まで一八ファル
サンク。ホーイ Khuy まで二〇ファルサンク。サルマー

ス Salmas まで一八ファルサンク、マラーガ經由で二六
ファルサンク。サラウ Saraw まで二〇ファルサンク。
マラーガまで二〇ファルサンク。デイフヴァーラカーン
Dihkwaragan まで八ファルサンク。ブランド Marand
まで一五ファルサンク。ナフジャヴァーン Nakhjavān
まで二四ファルサンク。

注

(1) 昨年の拙稿の補訂。七七頁下段一二行目、七九頁
上段四行目、下段五、一二行目の「大市」を「小市」
と訂正。また昨年の本誌の裏表紙の英文タイトルは
明らかに誤っているので「Countries neighboring
Adharbayjān, a translation of Nuzhat al-Qulūb」
と訂正。

(2) アゼルバイジャン全般の歴史地理に関しては *En-
cyclopaedia Iranica* 第三巻の *Azerbaijan* の項目
が詳細で、よくまとまっている。

(3) タブリーズに建設された「ガザニーヤ」について
は、羽田正『牧地都市』と『墓廟都市』、『東洋史研究』
四九一、一九九〇に言及がある。Nuzhat al-Qulūb
の記述もこの研究の中で引用されている。

(4) 原文には「ブークーヤ Bākūya」とあるが、文脈
に合わない。Dabir-Siyāqī 校訂本の脚注(八五頁)
に従い、マーカーキーヤと読んだ。マーカーキーヤは現在の

マクーのことで、タブリーズ・エルズルム街道のトルコとの国境に最も近いイランの町である。

- (5) *Qubba al-Islam* はイスラーム圏における文化・学術の中心地に与えられた美称で、他にマールヴァラー・アンナフルのフハーラーとアルメニアのアフラートが二三世紀にこのように呼ばれた例がある。Juwayni, *Tarikh-i Jahangushay*, jild 1, Leyden & London, 1912, p. 75. Ibn Btbi, *al-Awamir al-'Alaiya fi al-Umur al-'Alaiya*, Ankara, 1956, p. 377.

- (9) *Le Strange* の英訳によれば、著作の名は *Majma' Arbab al-Maslak*、著者名もルクヌッディーン・ジュフナイニー Juwayni が正しい。Nuzhat のテクスト二頁にはジュフナイニーの *Majma' Arbab al-Mulk* と出ているが、F. G. の七頁にはホーイの *Majma' Athar al-Mulk* (別写本には *Arbab al-Maslak*) と出ており、いまのところ著者名及び作品名を確定しがたい。

- (7) ラッヴァード朝は元来アラブのアズド族がタブリーズを本拠地として建てた王朝であるが、周囲の民族的環境により、その王統は次第にクルド人化していった。ヴァフスーダーンの名はイブヌルアスィールによれば Abu Mansur Wawsudan b. Mamlan である。その治世(四一六一—一〇二五—五九)はセルジュク朝勢力西進の先兵となったトゥルクマーンのイラーキー集団がアゼルバイジャンに初めて姿を現し、現代に連なるアゼルバイジャン住民のト

ルコ化の端緒となった時代であった。Ibn al-Athir *al-Kamil fi al-'Uw'atib*, al-mujallad al-tasi', Bayrut, 1979.

- (8) ラシードウッディーンの『集史』によれば、六七一年(一二七二/三)年冬タブリーズに地震があり、マナル(光塔)の頂部が落下し、多くの家々が破壊されたという。この地震は *Nuzhat* に記録されてきた。Rashid al-Din Fadi Allah, *Jami' al-Tawarikh*, jild III, Baku, 1957, p. 143.

- (9) 原文ではマウキラの語の後 *mahalla ast* の二語が続いているが、文脈上解釈の仕様がなす。Dabir-Siyaq 校訂本の脚注(八六頁)によれば、一写本ではこの部分に空白部が見られ、それは町の街区の数を挙げた部分で、「…箇の街区がある」の意味になるのではないかと想定している。

- (10) 原文は *bar shish kaylan sabit ast*. *Le Strange* の英訳では「六つの導管の中を流れる」となっている(八〇頁)が、*kayl* の語に「導管」の意味を見いだせず、*sabit* の語にも「流れる」の意味を見つけられなかったため、英訳には従わなかった。

- (11) 原文は *Milk*. *Le Strange* はこれを *mulk* と読んで「水は全て国家に属する」と解釈しているが、この場合 *milk* と読んで「私有財産」の意味に考えた。この意味の場合、カーリース(地下暗渠)は富裕者によって開削されたのであるから「私有財産」として問題はないが、河の水まで「私有財産」と考えら

れるかどうかが問題となる。

- (12) タバルザドはペフラヴィー語で『旧約聖書』「出エジプト記」に見えるマナ(神与の食物)の意味が与えられてゐる。D. N. MacKenzie, *A Concise Pahlavi Dictionary*, Oxford U. P., 1971, p. 81.
- (13) 以下、四つのルバーイーの韻律はいずれもハザジ hazaj 韻である。
- (14) F. G. 七五六頁によれば、この詩人は有名なサアディー・シーラーズイー(一二九一没)と同時代人であり、魅力的な詩、熱情をかき立てるガザル(叙情詩)の作者であつたという。
- (15) F. G. 六六六頁によれば、このシャイフ(有力なスーフイー)はハリーフア、ナースイル時代の人。五九二(一一九五/六)年没。
- (16) F. G. 六六七頁によれば、この二人のシャイフはファキーフ・ザーヒドの同時代人で、死後それぞれカジールに埋葬された。
- (17) 原文では *Diya' al-Din, Dabir-Siyāqi* 校訂本八九頁に従う。F. G. 六七四頁によれば、サーイヌッディーンは七〇三(一三〇三/四)年没。ジャラーンダーブに埋葬された。
- (18) セルジュク朝のスルターン、サンジャルの頌詩人で、諸学に通じていた。一一六八年没。F. G. 七一―七二四頁。
- (19) F. G. 七二八―三〇頁によれば、この有名な詩人は五八二(一一八六/七)年タブリーズで没した。

(20) F. G. 七三七頁によれば、五九八年ラビウI月(一一〇一・一二・二九―二〇二・一・二六)タブリーズで没した。

(21) F. G. 七三六頁によれば、六〇二(一一〇五/六)年タブリーズで没した。

(22) F. G. 七四三頁によれば、シルヴァーンの帝王マヌーチフルの頌詩人。

(23) F. G. 六七二頁によれば、アバガ・ハン時代のシャイフで、六七〇(一二七一/二)年没。またカジュージャーンはタブリーズ南方一ファルサングにある村の名であるという。

(24) タムガー税とは、都市の商人や手工業者に課された税金。詳しくは、本田實信「タムガ(TAMGA)税に就いて」『和田博士古稀記念東洋史論叢』一九六一、講談社。八三三―四七頁参照。

(25) *Bartold Spuler* によれば、ガザン・ハンは七〇一年ラジャブ月一日(一三〇二・三・二)に始まる財政暦を採用した。それは太陽暦に基づき、イルハン国の末期までハーニーまたはガーザーニー暦として通用していたという。B. Spuler, *Die Mongolen in Iran*, 4. Auflage, Leiden, 1985, SS. 264 & 365. ハーニー暦四〇〇年は西暦一三三四年に当たす。

(26) 原文は八七〇トゥーマーン五〇〇〇ディーナール。この数字は余りに大きすぎ、本稿中にも現れるタブリーズ地区全体の徴税額一一五トゥーマーンをはる

かに上回ってしまふ。そのため、八七〇は八七の誤りと考えた。ちなみに前掲本田論文所載のマーザンダラーニーの *Risala-yi Falakuya* による一三四〇年のタブリースのタムガ税収入は二二七万ディーナール、すなわち二二七トゥーマーンである。(八三八頁) 一年違いのこの数字の大きな差はどこから来るのか、にわかには断定は出来ないが、ともかく八七〇トゥーマーンという数字が大きすぎることは間違いないであろう。

- (27) D.K. に *よれば*、この村の現在名はバースマンジ *Bāsmānī*. S. 518.
- (28) D.K. に *よれば*、この村の本来の名はサイーター *Sa'īdābād*. S. 550.
- (29) サマルカンドの *スグド*、ディマシクの *グータ* はイラクのバスマラに近いウブッラ河と並んで、一〇世紀に著されたイスラーム地理書においてイスラーム圏の三大景勝地とされていたところ。三一八一—二一九三〇—三一年頃に書かれたと考えられるイスタフリー *Istakhrī* の *Kitāb al-Masālik al-Mamālik* に *よれば*、このうちサマルカンドの *スグド* が最も優れている *よれば*、B.G.A. vol. 1, M. J. de Goeje 校訂本 *Leiden*, 1967 (reprint), pp. 293—5.
- (30) シイフ・ズッヴァーンはフールスの *クッル Kurt* 河流域の溪谷の名である。前掲イスタフリーによれば、ヌーバンジャン *Nūbanjān* の町から約二フアルサフのところであり、この中の村の木々は霧がか

かって (*ghattat*)、中に入らないとそれらが見えないほどであり、フールスの溪谷のうちで最も素晴らしいところである、という。pp. 121 & 128.

- (31) この場所はハマダーンの五つの郊外区の一つ *ファリーヴァール Farīwār* に属し、「至上の楽園の写し絵であり、チーンの画廊も羨む」ようなところであると *Nuzhat* のイラク・アジャムの章で説明されている。テクスト七二頁。

- (32) D.K. に *よれば*、この村の現在名はホスロウシャ *Khusrāwshāh*. S. 528.
- (33) D.K. に *よれば*、この村の正しい呼び名はウスクーヤ *Uskūya*. S. 544.
- (34) D.K. に *よれば*、この村の正しい呼び名は *スィース Sīs*. S. 557.
- (35) D.K. に *よれば*、この村の正しい呼び名は *シャビスタル Shabistar*. S. 548.
- (36) D.K. に *よれば*、この村の正しい呼び名は *ヴァーイカーン Wayqān*. S. 562.
- (37) D.K. に *よれば*、この郊外区の正しい呼び名は *ルーダカーン Rūdāqān*. S. 547.
- (38) D.K. に *よれば*、この村の正しい呼び名は *イーヴァンズ Iwān*. S. 530.
- (39) D.K. に *よれば*、この村の正しい呼び名は *サール Sar*. S. 553.
- (40) 原文は *AHJWM* 但し、脚注には *injū ham* の形が示されている。ここでは脚注の形を採用する。イ

インジュ地とはイルハンの王領地のことである。
(41) 一五トウマーの総額は諸地方の徴税額二七
トウマー五〇〇デイナーに前掲注(26)
の町のタムガ税額八七トウマー五〇〇デイ
ナールを足して得られたものである。この場合、も
し原文通り、町のタムガ税額が八七〇トウマー
であったならば、総額一五トウマーという計
算は全く成り立たない。